

永享五年八幡縁起絵巻の 「ライフ」とその「アフターライフ」

メラニー トレーデ
Melanie TREDE

今日の発表は、先に刊行された佐野みどり・新川哲雄・藤原重雄編『中世絵巻のマトリックス——中世的想像力とは何か——』（青簡社、2010）の中の論文「永享五年八幡縁起絵巻の「生涯」とその「余生」」に基づいた訂正されたものです。都合により、この稿では図版は省略しますので、同書をご参考にしていただければと存じます。

テキストのみで伝わった縁起に、最高権力者が絵を添え、最高の質の絵巻物というカタチを現出させた時、どのようなことが起きるのでしょうか。

絵画化されることによって美術品としての性格がクローズアップされると、縁起の宗教的・政治的および社会的な意味は後退していくのでしょうか。

私の研究スタンスは、絵巻を常に不動のひとつの観点から評価されるべきものとして取り扱うのではなく、政治・社会・文化・宗教などの新たな文脈の出現によって、常に評価と価値を変えてゆくモノとして捉え、その変化の様態そのものに注目するものです。民俗学者イーグル・コピトフは、美術品などが時間的な経過に従ってそのクオリティ（性格）を変化させる現象を、人間にたとえて、ライフとアフターライフの言葉を用いて考えました^①。クオリティを規定するのは、商品化（金銭的価値に還元できるものとして扱われること）と神聖化（つまり、聖なるものとなること）という二つの対極的な概念です。美術品はそのライフとアフターライフにおいて、多様な形で商品化と神聖化の間を揺れ動くというコピトフの考え方を援用しながら、今回の発表では「神功皇后縁起絵巻」の分析を行います。

まず「神功皇后縁起絵巻」のライフについて考えましょう。

当時最高の能書家と宮廷絵師たちによって制作された、この二巻の「神功皇后縁起絵巻」は、室町幕府第六代将軍足利義教により永享5年（1433）4月21日に誉田八幡宮に奉納されました^②。なお、義教は同じ日に誉田八幡宮に八幡神に関連した絵巻一組を、京都の石清水八幡宮と九州の宇佐八幡宮にそれぞれ一組ずつの八幡縁起絵巻を奉納しています。つまりこの「神功皇后縁起絵巻」は、一連の膨大なプロジェクトの一環でした^③。

ところで、義教の神功皇后縁起絵巻奉納の意図を考えるうえで注目されるのは、奥書でわざわざ「新圖」とこの絵巻を呼んでいることです。しかもそこにはパトロンであった義教の、八幡縁起絵の新しい領域を切り開こうとした願望も潜んでいるのです：

「新圖 神功皇后之縁起奉納
誉田宗廟之宝前絵其両卷象
于二儀即憑不測之感通常施
無為之徳化而已」^④

そこに八幡縁起絵のライフとアフターライフにおける「美的ターン」、つまり、美術品への転換と呼べる変化を見て取ることができます。

素朴な地方の絵から皇室の威信を示す絵巻への質的变化は、政治的覇権争いの中で、義教自身の政治的な意図によって成し遂げられたものです。しかし、絵巻という媒体で美的ターンが起きたことはまた、八幡神および八幡宮が、鎌倉時代に壮麗な絵巻として描かれた北野天神もしくは春日明神と同等の、靈験あらたかな主要な神へと昇格したことを示してもいます。この昇格によって、社会的エリートのみに関連が許された信仰の対象としてこの絵巻は生き続けていくことになったのです。

そこで、以下、この永享5年成立の「神功皇后縁起絵巻」を、八幡縁起を絵

画化した他の早い例と比較し、義教主催の絵巻の「美的ターン」について論じていくことにしましょう。そのために、まず八幡縁起の内容を簡単に確認しておきます。義教の絵巻は、鎌倉時代後期に成立した『八幡愚童訓』の内容にほぼ準じています^⑤。物語や絵巻は大きく二つに分かれ、前半の中心は、三世紀の三韓征伐などの神功皇后伝説です。そこでは、非業の死を遂げた夫の仲哀天皇に代わって、朝鮮半島を侵略し、新羅国王を日本へ朝貢させる神功皇后の話が語られています。その後胎内に男児を宿した神功皇后は日本へ凱旋したのち、応神天皇を生みます。応神天皇は実は八幡神の化身です。ですから、後半では、この八幡神がさまざまな形で現れ、宮崎、宇佐、そして石清水という三つの主要な八幡宮の成立について語られています。

義教の「八幡縁起絵巻」の「美的ターン」を理解するために、比較資料として取り上げたいのは、元亨2年（1322年）の出光美術館所蔵本です^⑥。

出光本の最初の場面には、新羅征伐に向かう神功皇后が宮中から輿に乗って出発する様子が描かれています。護衛の歩兵は数も多くなく、まばらに行進しています。左下に見える腰の曲がった老人は、実は住吉明神の化身です。神功皇后と住吉明神との出会いは物語の核となるべき場面のはずですが、あまり目立たない位置にさりげなく描かれているのが特徴と言えましょう。

同じ場面が、「神功皇后縁起絵巻」においては、最も重要な箇所として、全長715センチにも及んで、劇的な物語の進行が念入りに描写されています。そのクライマックスとして、神功皇后と住吉明神の出会いが演出されているのです。つまり、輿は絵の中心に描かれた住吉の翁の方へと向かっています。従者たちの行列は出光本とは対照的に中央にひと塊となって描かれ、翁の存在を強調しています。

また、「神功皇后縁起絵巻」では新羅との海戦の場面が出光本に比べて4倍ものスペースが当てられ、視覚的な物語展開が強調されます^⑦。随行する神の一人である玉垂宮が干珠を海に投げ入れると、海が後退し、干上がった地上で戦いが行われます。その後、満珠によって新羅の兵士たちを溺れさせる様子が描

かれています。神功の兵士たちは龍と鳳凰とが対になった船、すなわち龍頭鶴首の船に乗り、「神功皇后縁起絵巻」に王朝風の好みを添えています。

一方、出光本は初期の文献テキストに忠実に従っており、龍を船の装飾としてではなく、実際に新羅の兵たちをむさぼる生きものとして描いています。

義教が奉納した絵巻と先行する八幡縁起との間の相違は、神功皇后が新羅王を服従させる場面において、もっとも大きなものとなっています。神功皇后の姿は画面上部に見られ、彼女は厳然と事の成り行きを見下ろしています。出光本においては、彼女は新羅王たちとほぼ同格の扱いで描かれているのに対して、義教の絵巻での神功皇后は威厳のある姿で登場し、服従する新羅王と対比されています。

出光本に対して「神功皇后縁起絵巻」では、王朝風の壮麗な雰囲気を出すことや有職を正確に描くことに明らかに重点が置かれ、行列や建築は豪華さを強調した描写となっています。これらは、この絵巻が典礼に精通した社会的エリート鑑賞者に向けられたものであることを物語っています。

詞書を清書した貴族の能書家たちと宮廷の絵師たちは、こうして美的ターンを成し遂げたのです。

次にアフターライフについて考えてみたいと思います。

ここではまず「神功皇后縁起絵巻」のアフターライフを、四つのカテゴリーに分類し、眺めていくことにします。

(一) 16世紀から17世紀にかけて、「神功皇后縁起絵巻」は模写されるべき「聖なる」テキストと見なされ、模本が次々と八幡宮に奉納され、崇拝されました。

(二) 絵巻はその後、17世紀半ばから19世紀にかけて、美術的な評価を受ける対象となり、専門絵師たちが様式や構図、彩色などの技法を培うための手本となりました。絵巻は美術品と化し、モノとしての魅力のみが注目され、その政治的含意はほとんど無視されるようになりました。

- (三) 17世紀後半にはじまって19世紀後半にかけて盛んに出版される木版の旅行案内書において、絵巻は、菅田八幡宮の著名な神宝として喧伝されました。この段階はコピトフの用語でいう「神聖化」と「商品化」、つまり社宝としての「神聖化」と出版文化の中で普及される過程で形成された「商品化」とを融合させたものと呼ぶことができます。
- (四) 最終的に、「神功皇后縁起絵巻」は美術史的な評価とカノン化の対象となりました。明治43年に旧国宝に指定され、昭和30年代に改めて重要文化財に指定されたのです。この最後のカテゴリーは、近代において絵巻が宗教的文脈から、「美術品」として評価される文脈へと移り、つまり美術史的価値によって新たに神話化された例と言えます。

第一のカテゴリー、つまり奉納行為としての「神功皇后縁起絵巻」の模写について考えてみます。

16世紀に、熟練した絵師たちと能書家たちによって、二つのほぼ忠実な模本が作られたことは、当時「神功皇后縁起絵巻」が名声を博していたことと、絵巻が神宝としての「ライフ」を送り続けていたことを示しています。模本の一つは、天文4年(1535年)、東大寺の境内に創建された手向山八幡宮に奉納されたものです^⑧。絵巻の奥書によれば、「大和国絵所」の地位にあり、熟達絵師であった宗軒によって描かれました。詞書は東大寺の広順によって書かれました。広順は、かの三条西実隆の息子で、絵巻もまた東大寺の勸進僧・祐全によって制作を依頼されたものでした^⑨。

この「手向山本」には、「神功皇后縁起絵巻」とまったく同じ海戦の場面が見られます^⑩。対照的に、より古い作例である甲本の模本が作り続けられてきたことは、「神功皇后縁起絵巻」が限られた範囲で閲覧されていたことを物語っています。

国文学研究資料館のコレクションに所蔵される八幡大菩薩御縁起は、義教の絵巻制作から30年以上後の文正元年(1466)のもので、パトロンは不明です。

手向山本が「神功皇后縁起絵巻」と同様に新羅の人々を鬼のように強調して描いていたのに対して、この絵巻は、新羅の兵たちを飲み込む龍の描写を受け継いでいます^⑪。

東大寺手向山八幡宮の16世紀の模本とは別に、奉納品とされた「神功皇后縁起絵巻」の別系統の模本で、全巻を模写した17世紀の模本もあります。以上のように、義教による絵巻の奉納は、16世紀から17世紀にかけて数少ないエリートたちによる絵巻制作を刺激し続け、義教が奉納した絵巻自体は、神聖で、差別化されたモノとしての地位を保持し続けたのです。

「神功皇后縁起絵巻」の「アフターライフ」の第二のカテゴリーにおいては、つまり以上言及しましたように、絵巻は美術品と化し、モノとしての魅力が主に注目されるなどという新しい「ライフ」を送り始めました。それは、信仰にかかわる絵巻の内容よりも、専門の絵師のための手本として、絵の質に焦点があてられたものです。

その最初の例として知られるのは、狩野探幽の手になるものです。探幽は寛永17年（1640）以前にすでに「神功皇后縁起絵巻」を見ていたらしく、文献史料からも、寛文6年（1666）に全巻の模本を制作していたことが明らかになります。

探幽が模写を行っていたことは、探幽による「神功皇后縁起絵巻」の極書と、おおがのひぎ大神比義という人物による祈請の場面（八幡神が三歳の少年の姿で竹葉の上に顕現する）が寛文6年の年記のある掛軸に模写されていたことから分かります^⑫。

アフターライフの第三カテゴリーは、18世紀における旅行の増加と、知識を本に集積させることへの熱狂に基づくものです。「神功皇后縁起絵巻」はその頃、誉田八幡宮の神宝として、版本の名所図絵の中で、旅行者と巡礼者たちに喧伝されました。

旅行案内書の例として挙げられるのは『河内名所図会』で、享和元年（1801）に秋里りとう籬島によって編集されました。この本の中の誉田八幡宮神宝目録におい

て、「神功皇后縁起絵巻」は「当社伝記」という題名で載り、11世紀の後冷泉天皇（1025年～1068年、在位1045年～1068年）の宸翰という額に次いで古いものです¹³。

このタイプのアフターライフは、コピトフの用語で商品化の側面と神聖化の側面を、明らかに融合させたものとなっています。

最後のカテゴリーでは、「神功皇后縁起絵巻」が美術史的な評価および古典化の主題となっています。この傾向は、慶安から承応年間（1650年代）の、狩野一溪（1599-1662）による日本の絵師についての最初の包括的な論考『丹青若木集』に始まります。一溪は「神功皇后縁起絵巻」を土佐光信（1465-1525 活躍）によるものとしました。光信はこの絵巻制作当時には生まれていないのですが、この比定は近代に入ってから一般的に見られるものでした。しかし、絵師の住吉広行（1755-1811）は、文化8年（1811）以前に刊行された『倭錦』において、一溪の絵巻の一覧の誤りを指摘し、絵を土佐広周筆のものと鑑定しました¹⁴。

義教の「神功皇后縁起絵巻」は明らかに神宝としての「ライフ」から離れ、美術史的な議論の中で別の「アフターライフ」を送っています。しかしながら、美術品としての絵の受容は、鑑定家の議論に常に限られてははず、近現代の政治的な展開にも密接に結びつきうるものです。

顕著な例として、「神功皇后縁起絵巻」が明治43年に国宝に指定され、さらに『國華』という美術雑誌の昭和13年10月号に初めて紹介されたことが挙げられます。そこに掲載された二点の図は、異国の王たちが服従する場面から取られたものです。絵に描かれていず、詞書だけに言及されている神功皇后の岩に刻んだ文、つまり「新羅国の大王は日本の犬なり」を、作品紹介を担当した著者は意図的に付け加えています。この掲載場面の選択は戦争中という当時の日本を考えれば、まったく偶然ではありませんでした。

この最後の美術史的なアフターライフのカテゴリーは、縁起がいかに絵画作品のカタチとして近代の神話に変容しうるかという好例です。

今現在でも、いかに八幡縁起絵巻に政治的な意味合いがこめられているかを紹介したいと思います。

サンフランシスコ・アジア美術館で2007年に開催された展覧会“Telling Tales: Illustrated Storytelling Scrolls”「物語を語る：物語絵巻」に、当館所蔵の「八幡大菩薩御縁起」の甲本が展示されました。すると、韓国系アメリカ人および韓国人が、美術館がこの絵巻に取り上げられている日韓関係を正統的な歴史観として、しかも解説なく展示したと、展覧会や美術館を強く批判しました。この事件は、新聞記事、ラジオのインタビューやブログなどで取り上げられ、大きなスキャンダルとなりました。結局、美術館から公式に謝罪がなされました^⑮。

明らかに、八幡縁起はその視覚的なカタチから、政治的な媒体として現在も解釈され続けています。

結論に入りますと、「神功皇后縁起絵巻」は、信仰の対象、あるいは絵師の手本として模写されることによって、そして美術史的な評価や政治的な再評価の対象として流通することによって、生かされ続けてきたと考えられます。義教は「神功皇后縁起絵巻」に「将来のための手本を用意する」という目的を設け、他の八幡縁起絵巻とはまったく別の新しい魅力を絵巻に与えました。

この絵巻の未来はどのようなものとなるのでしょうか。今後も見続けていきましょう！

[注]

- ① Igor Kopytoff. “The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process.” In Appadurai, Arjun, ed. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. (New York, 1986), 64–91. イゴール・コピトフ「モノの文化的伝記——過程としての商品化」アルジュン・アパデュライ編『モノの社会的生命——文化的視点からみた日用品』、(ニューヨーク：ケンブリッジ大学出版、一九八六年)、六四頁～九一頁。
- ② カラー図版は、詞書の翻刻および寸法の情報ともども、羽曳野市史編纂委員会編『羽曳野市史文化財編別冊・絵巻物集』誉田宗廟縁起・神功皇后縁起(羽曳野市、一九九一年)に掲載されています。
- ③ 宇佐本および石清水本の奥書は、いずれも『訂正増補 考古画譜』(黒川真道編『黒川真頼全集』国書刊行会、一九二五年)に翻刻がされていますが、宇佐本はすでに失われ、石清水本は昭和二十二年二月十二日に焼失したものの、絹本であったこと、および天地四三センチであったことは、文

化庁編『震災等による焼失文化財』増訂版第六巻・美術工芸篇（便利堂、一九八三年）所載のデータにより分かります。

④神山登氏による現代語は以下のとおりです：

「新たに神功皇后の縁起を図して、誉田宗廟の宝前に奉納す。その両巻を絵すること、二儀にかたどる。すなわち不測の感通によって、常に無為の徳化を施さんとするのみ。」

奥書の原文や現代語は注②の書物に掲載されています。

⑤『八幡愚童訓』の二種のテキストは、桜井徳太郎・萩原竜夫・宮田登校注『日本思想大系 第二〇巻 社寺縁起』（岩波書店、一九八二年）、一六九頁～二七三頁に翻刻されています。広く知られている甲本は、花園天皇（在位一三〇八年～一八年）の時代に遡り、比較的流通していない乙本は、甲本よりもわずかに時代が先行する（おそらく一三〇一年～〇四年）と見られている。参照『社寺縁起』、二〇七頁。

⑥以下述べられる場面の図版は、冒頭に言及しました拙稿に、227-228 ページの図 1 と図 2 として掲載されています。

⑦これらの場面は、前掲の拙稿中の図 3 と図 4 になります。

⑧二巻の絵巻（紙本著色、高さ巻一は三〇・五センチ、巻二は三〇・四センチ）の図版は、奈良国立博物館編『社寺縁起絵』（角川書店、一九七五年）一一六頁～一三〇頁に掲載されています。

⑨祐全は天文四年（一五三五年）に勸進を始め、手向山八幡宮修復のための資金を工面する手段として八幡絵巻を制作した可能性が高いと思われます。彼はまた東大寺で「大仏縁起絵巻」制作の責任者にもなっています。

⑩ここに言及されている場面は、拙稿の図 5（234 ページ）に当たります。

⑪ここに言及されている場面は、拙稿の図 6（234 ページ）に当たります。

⑫探幽の掛幅の図版は、展覧会図録『狩野探幽の絵画——江戸初期、抒情美の世界』（静岡県立美術館、一九九七年）七八頁～七九頁に掲載されています。

⑬『河内名所図会』は、永野仁編『日本名所風俗図会』第一一巻・近畿の巻一（角川書店、一九八三年）に翻刻が掲載されています。なお、「誉田宮神宝」のリストは 32 ページに掲載されています。

⑭『倭錦』は秋山光和著『絵巻物』（小学館、昭和 43 年）、211 ページに掲載されています。

⑮次のサイトをご参照ください：

http://news.ncmonline.com/news/view_article.html?article_id=bb4b59e9c80a06a29d7242ae85fa0e5

<http://www.aamdocents.org/AAM/Japan/Rotation/Painting/b64d6StoriesShintoHachiman.htm>

【付記】

佐野みどり氏、阿部泰郎氏および藤原重雄氏や中世掛幅縁起絵研究会の諸氏にあらためて感謝し、日本語翻訳の永井久美子氏、そして、今回の原稿の仕上げに多く指摘していただいた仲町敬子氏に厚くお礼を記しておきたいと思います。また、元亨二年出光美術館所蔵本の絵巻の存在を教えてくれた出光佐千子氏、絵巻の研究や調査を援助してくれた笠嶋忠幸氏、質問に答えてくれた廣海伸彦氏に感謝します。

* 討議要旨

小林健二氏は、発表者の「商品化」という解釈を確認した上で、誉田八幡がそれを売りものとしながら宗教的戦略を以て事業展開していったのか、と質問し、発表者は「商品化」という概念は現代的な商売の意味ではなく、モノとしての価値を当てはめられた過程、つまり商業化されていく、

という意味合いで使っていた。絵巻の模写本を巡礼者等に見せていた可能性は高く、そのための模写と思われ、また、実物を見られなくても、存在自体に価値があったから、宣伝効果は大きかったと回答した。村尾誠一氏は義教本について、美術品としての性格は後世認められたものか、当時から既に洗練されたものと意識されていたのか、と問い、発表者は、義教の場合は故意に美的側面を強調したと考えられ、これは絵巻と同時に菅田八幡宮に奉納された「菅田宗廟縁起絵巻」の後書からも裏付けられると応答した。山下宏明氏は、中世という時代や、足利将軍家の文化活動を考える上で、非常に刺激的な発表であったと締めくくった。